2018年(平成30年)7月31日 火曜日 山陽新聞

一日一題

泣こう、明日のために

AMDA理事 難波 妙

この一日一題、第1回は、2年前の熊本地震で被災地となった私の故郷・熊本県益城町へのご支援に対する感謝で始まった。まさかこの最終回で、倉敷市や私が暮らす総社市を襲った豪雨災害についてつづることになるとは。もはや想定外なんてどこにもない。すべてを想定内とする自然の驚異と人間の脆弱さ。心折れるような被災地の惨状。そして言葉では表せない臭い。心なえる暑さ。

そのような中、救いとなったのが、片岡聡一総社市長の「被災者第一主義」の指令に必死になって応える市職員と関係者、SNS(会員制交流サイト)で結集した若い力、1万人に上るボランティア、全国16以上の自治体からの応援―。被災経験を持つ仙台市や益城町の人の姿もあった。災害を乗り越えた経験が的確なアドバイスとして支援活動に生きる。

そして、AMDAの緊急医療支援活動に駆け付けてくださった多くの医療関係者やボランティア。地元の医師を中心としたチームで被災地の医療を支える。熱い思いが一丸となってこの未曽有の災害に立ち向かっている。

豪雨から3週間が過ぎた。被災者も支援者も激動と緊張の毎日。目の前に突き付けられた現実はあまりにも過酷すぎる。

熊本地震の後、ちょうど3週間たった頃。避難所で偶然、大学時代の思い出の曲を耳にした。なぜかせきを切ったように涙があふれた。避難所の裏で1人、思いっきり泣いた。心の緊張が一瞬にして緩んだ。

そして、その時に思った。我慢は必要ない。助けてほしいときには遠慮なく「助けて」と人の力を借りればいい。力になりたいと思っている人たちが周りにはたくさんいる。体の疲れは痛みで分かる。しかし心の疲れは自覚できない。せめてつらいときはつらいと言おう。そして泣こう、声を上げて。あふれる涙で顔と心を洗おう。明日のために。

2018・7・31